

【角を矯めて牛を殺す】

「牛の角が曲っているのを気にして、これを直そうとしたために牛そのものを殺してしまう」ということで、僅かな欠点を直そうとして、かえってその全体をだめにしてしまうことや、取るに足りないちっぽけな問題にとらわれて、肝腎な大問題をなおざりにすることなどを戒めた諺です。

親、とりわけ今の親は、わが子に対して求める所が多いものですから、よくこの諺を座右に置いて、戒めにして頂きたいと思います。

およそ欠点というものは、気にし出しますとそれが大層大きなものに見え出してきて、たまらなくいやなものに思われるものです。しかし、気にしなければ、また、気にならない者にとっては、それこそ取るに足りないものなのです。

それに、欠点は、ある意味ではその人の長所と見えないものでもありません。親に取ってはたまらなくいやな欠点に思われるものでも、よその人にはほほえましく見えて、少なくとも大した欠点ではないことが多いものです。

さらにまた、欠点と長所とは裏表の関係にある場合が少なくありません。例えば、静かな鷹揚な態度の人は鈍感な欠点があるかも知れず、反対に敏感な人は神経質で怒りっぽい欠点を持つ人であるかも知れません。このような場合は、欠点を取り除こうとすれば必然的にその長所を除かれてしまいます。

とは言え、親は子供の欠点を黙って見てはいられないものです。つい、がみがみと言いがちですが、ではこれが、その欠点を直すのに少しでも役立つかと言いますと、実はその反対なのです。注意すればするほどその欠点が目立つようになることは、気にして触れれば触れるほどひどくなる“にきび”に似ています。気にせずほっておいた方が、欠点の場合でもにきびの場合でも直りやすいのですが、それがまた難しい点でもよく似ています。

“矯”という字は、矢と喬とで作られています。喬は、夭(ヨウ)と高(コウ)との合字です。音も yô と kô で kyô です。夭は大の字の頭の部分が横に寝ていますように、“頭の傾いた人”を表わした字です。生まれつき頭の傾いた人は短命なので、夭は“夭折”(ヨウセツ)若死にというように使われますが、女の人が故意に首を傾けると、“妖艶”(ヨウエン)(なまめかしい)に見えてきます。

さて“喬”は、“高くて曲っている”のが本義ですが、人名では“たかし”と読むように、単に“高”の意味に使われることが多いようです。“驕”は、丈の高い馬のことで、“勢いがよい”“威張る”意味に使われ、“矯”は、背の高い女のことで、“魅力的な女”の意味に使われています。

“矯”は反対に“曲”の意味に使われ、“曲った矢”を表わしています。曲った矢はどうしても直す必要があるので、“直す”という意味を表わしたものです。ほんとに曲った矢はほっておくわけにはいきませぬ。